

豊山学報・第66号
弘法大師御生誕千二百五十年
記念特別号 抜刷
令和5年3月発行
真言宗豊山派総合研究院

『金剛頂経』和訳(七)

高橋尚夫

『金剛頂経』和訳(七)

高橋尚夫

はしがき

本稿は「第五・悉地を成就する智」の〔一〕四種悉地智(H235~242)と〔二〕秘密法(H245~248)との部分である。慶喜蔵の註に、

「汝の義利を生じる悉地の智と神通の悉地とは何か(kim te 'bhirucir arthotpattisiddhijñānaṃ vā ṛddhisiddhiniṣpattijñānaṃ)(H235)云々より、vajrahara(H249)と言うまでは三昧耶と(P 3a)灌頂を獲得した彼らに対して、師は〔弟子の〕楽欲に従って悉地の智を説くべきであると示すために、悉地の智の相続を説くのである」

とあるように、灌頂を受けた弟子がいかなる悉地を得るか興味ある箇所である。『五部心観』*に理解を助ける図絵があるので併せて収録しておく。

*『五部心観』については、様々な版本があるが、大正蔵図像部二(pp.73~148)に所収されている図を用いた。道玄『六種曼荼羅略釈』京都青蓮院蔵本(大正蔵図像部二 pp.1~71)の訳を併記した。真言の番号は判りやすく私に付した。

なお、『五部心観』の図像については以下の諸本を参照されたし。

- 梶尾祥雲『金剛頂経の研究』梶尾祥雲全集、別巻3、臨川書店、昭和60年
- 八田幸雄『五部心観の研究』法蔵館、昭和56年
- Lokesh Chandra: *A ninth century scroll of the Vajradhātu Maṇḍala*, ŚATA-PIṬAKA SERIES Volume 343, New Delhi, 1986

参考文献

略号

梵文テキスト

TS 堀内寛仁「梵蔵漢対照 初会金剛頂經の研究 梵本校訂篇」(上)(下)、密教文化研究所、昭和58年(上)、昭和49年(下)

H 堀内本の番号。なお、堀内本にはないが、真言の所出の順に○番号を附した。

チベット訳

Tib Śraddhākaravarman, Rin chen bzang po 訳；“De bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsduṣ pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo”

P 北京版西藏大蔵経 大谷大学 No.112, na 1~162

D デルゲ版西藏大蔵経 東北大学 No.479, na 1~142

N ナルタン版西藏大蔵経 大正大学 No.432, ja 213~440

漢訳

不空 不空訳『金剛頂一切如来真实撰大乘现証大教王経』三卷、大正蔵18、No.865

施護 施護訳『仏説一切如来真实撰大乘现証三昧大教王経』三十卷、大正蔵18、No.882

金剛智 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』四卷、大正蔵18、No.866

註釈

慶喜蔵 Ānandagarbha ; Sarvatathāgata-tattvasaṃgrahamahāyānābhisamayānāma-tantravyākhyā-tattvālokakāri-nāma (P No.3333, D No.2510)

釈友 Śākyamitra ; Kosalālamkāratattvasaṃgrahaṭīkā (P No.3326, D No.2503)

その他参考文献

☐ VŚ ☐ Karmavajra, Gshun nu tshul khrim 訳 : Vajrasikharamahāguhya-yogatantra

D デルゲ版 東北目録 No.480 (台北版 No.478, Vol.17)

P 北京版 大谷目録 No.113, Vol.5

☐北村全訳☐ 北村太道・タントラ仏教研究会 『全訳 金剛頂大秘密瑜伽タントラ』
起心書房、平成 24 年 11 月

遠藤祐純 「Ānandagarbha 造『Tattvāloka』「金剛界品」金剛界大曼荼羅 和
訳」ノンブル社、2014 年 10 月

同 「Śākyamitra 造『Kosalālaṅkāra』「金剛界品」金剛界大曼荼羅
和訳」ノンブル社、2015 年 7 月

津田真一 『和訳 金剛頂経』東京美術、平成 7 年

第五・悉地を成就する智

[一] 四種(義利・神通・持明・最上)悉地智

H235 それより、[阿闍梨は弟子に] 告げるべし。『汝の愛樂するものは何か。

- 1) 義利を生じる悉地の智か。あるいは、
- 2) 神通の悉地を成就する智か。あるいは、
- 3) 持明の悉地を成就する智か。あるいは乃至、
- 4) 一切如来の最上の悉地を成就する智か』と。

そこで、その[弟子の]愛樂するもの、それを彼に安立すべし。

慶喜藏 (D 137a3~, P 155b3~)

まさに以下の次第によって、「一切の曼荼羅に入ることなどの儀則を清浄にして、義利悉地等を成就することに結びつけるべきである」と示さんがために、「それより」云々というのである。「それより」というのは、清浄になした後得において、悉地を成就して、生起の印の智を教授すべきである。

釈友 (D 100a6~, P 117b3~)

第一の入より、最後の灌頂に至るまでが弟子を清浄にすることである。その入の果報は二種あって、見と非見である。そのうち見は義利悉地等である。非見は後の世によってで、順に無上正等菩提を獲得するであろう。

(1) 義利悉地・成弁 [印] 智

H236 それより、義利の悉地を成弁する [印] 智を教授すべし。

- 1) 庫の中にある金剛形 (vajrabimba: 金剛杵) を心臓に觀修せよ。觀修するうち、彼は大地の中にある庫を見る。
- 2) 金剛形を描いて空中に觀修すべし。

[その金剛杵が] 落ちる所を見れば、その所に庫が [あることを] 示すであろう。

3) 智者は舌に金剛形を觀修すべし。

『ここにあり』と自ら言葉をもって、真実義より語る。

4) 自分の身体がすべて金剛形より成るものと觀修しつつ、

[その金剛杵が] 遍入したもの¹が落ちるであろう所、その所に宝庫を示すであろう。と。

【訳註】1 「[その金剛杵が] 遍入したもの」 samāviṣṭaḥ、チベット訳にはない。自身の体が金剛杵となったその vajrabimba (金剛形) ととっておく。慶喜藏によれば毘首金剛杵 (羯磨杵) とある。

慶喜藏 (D 137a6~, P 155b7~)

そこにおいて、「義利」とは黄金などである。その生起の成就を獲得すること、それこそが「悉地」である。その印が「金剛庫」の理趣等である。その「智」が決定である。それを「教授すべきである」というのは、教示すべきである。このように示して、教誡 (man ngag : upadeśa) によってその印を知るところの印觀修 (phyag rgya bsgom pa : mudrā-bhāvanā) を学ぶことをそれぞれに教示すべきである。このようなことが全てにおいても「印智」の語義である。

1) 「庫の中にある金剛形を心臓に觀修すべし」というのは、まずはしばらく本尊瑜伽をなすべし。次に自の心臓の月上に金色をした om 字より、宝石で満たされた金の瓶を [化作し]、その上に hūm 字より金色をした金剛杵を想い、1ヶ月或いは6ヶ月 (D137b)、或いは1年の間、觀修すべきである。そこで、清澄性となることと、相の始終の觀修の後に、庫のある所に望みの梯子を見ることと、そこに行って、あるだけの財物によって供養等をなすことと、外に神饌 (gtor ma) を施して、金剛の鎖によって庫を縛ることと、場所と土地を護縛することと、真実の加持をなして、諷誦と觀修をなすならば、觀修した地 (sa : P 欠) の中にある庫はその地を見ることとなる、ということである。

2) 「[一] 金剛形を描いて空中に観修すべし」云々について、以前の如く、本尊瑜伽をなして、額の (P dpal ba'i, D dpal bar : 額に) kham 字より、赤い花のような庫を、その上に tram 字より金剛と似たものを生じて、真言を誦し、意をもって現出して、虚空を観修すべきである。次に以前の如く、一切の儀則をなして、実際に望む所において、同様に、金剛形を描いて、虚空を観修したのち、「[その金剛杵が] 落ちる所を見れば、その所に庫が [あることを] 示すであろう」

3) 「智者は [舌に] 金剛形を」云々について、同様に、本尊瑜伽をなして、自の舌にサフランの色をした pa 字を [化作] し、その上に金色の hriḥ (P śri) より金剛 [杵] を想うべきである。次に、以前の如く、観修と悉地をなして、実際に望む所、そこに行つて、同様に真実の語をなして、「智者は金剛形を舌に観修するならば、『ここにあり』と自ら真実たることを語るであろう」といって、加持した舌によって、無分別の理趣によって語ることをなすのである。

4) 「自分の身体がすべて」云々について、同様に、自加持等をなして、金色の a 字より毘首金剛を自身と想う、その観修をなして、成就すべき庫の場所に真実の加持をなして、(D 138a) それはまた、同様に、観修におけるその時、「落ちるであろう所、その所に宝庫があると示す」というのである。そこで、先ず掘つて、その後撰取するならば、誰も邪魔するものはないであろう。と世尊は仰せになった。

〔**釈友**〕 (D 100a7~, P 117b5~)

そのうち、しばらく見について、義利成就等は「義利の悉地」云々と説く。「義利」とは、金など (D 100b) である。その「悉地」とは獲得することである。そのものを「成弁」するのが、その「印の智」であり。何かある方便を観修することによって、義利を獲得することとなる。それが方便の智であつて、「義利の悉地を成弁する印の智」である。そこで、しばらく次に説く理趣によって、自加持等をなして、次に一ヶ月或いは四ヶ月の間、四時間この瑜伽を観修し、香と花と塗香等を資量がある限り供養すべきである。

1) 「蔵の中にある金剛形」云々について、月輪の上に宝庫の在処を置いて、その上に金剛形を観修すべきである。次に、一ヶ月或いは四ヶ月の間、出来る限り供養をなして、一晩中観修した後に、ある場所に宝庫があることを希望し、そ

こに行つて、何か適当なもので供養をなして、罪過無き神饌 (gtor ma) もまた、出来うる限り与えて、そこに坐して観修すべきである。さすれば、ある地方に宝庫があることを彼は見るであろう。

2) 「一金剛形を描いて」云々の瑜伽においても、前に説いたところの理趣そのもので、虚空における観修のみで勝進があると知るべきである。「どこであれ」云々において、金剛形を観修するとき、瑜伽の力或いは本尊の力によって、虚空より落ちた所を見る。そこに宝庫があると知るべきである。

3) 「智者は」云々において、ここでも又、瑜伽の力或いは本尊の力によって、言葉語るものとなると知るべきである。「真実義」というのは、これは法性の力より知るべきである。

4) 「自分の身体がすべて」云々において、羯磨部において自身が羯磨杵の理趣を以前に説いた理趣そのものによって観修せよと言う意味である。観修者はこれらの心呪を誦すべきである。

H237 そこにおいて、以下の心呪がある。

- 1) vajranidhi / バザラ ニヂ // (金剛の宝庫よ)
- 2) ratnanidhi / アラタンノウ ニヂ // (宝の宝庫よ)
- 3) dharmanidhi / タラマ ニヂ // (法の宝庫よ)
- 4) karmanidhi / キヤラマ ニヂ // (羯磨〈事業〉の宝庫よ)

【訳註】以下、観法を図にした『五部心観』の相当箇所を挿入しておく。

『六種曼荼羅略釈』

四種の成就観門が有る。(義利悉地 H236)

(一) 密言 ① vajranidhi (H237)

観門 蓮花台上に一の菩薩を画く。正立し、心に当りて五股金剛杵有り。竪に之を安ず。二手は各々金剛拳を作り、両傍に臂を垂る。

(二) 密言 ② ratnanidhi

観門 前の如く立てる菩薩を画く。左手は舒べて臍下に仰げ、一の三股杵を掌に

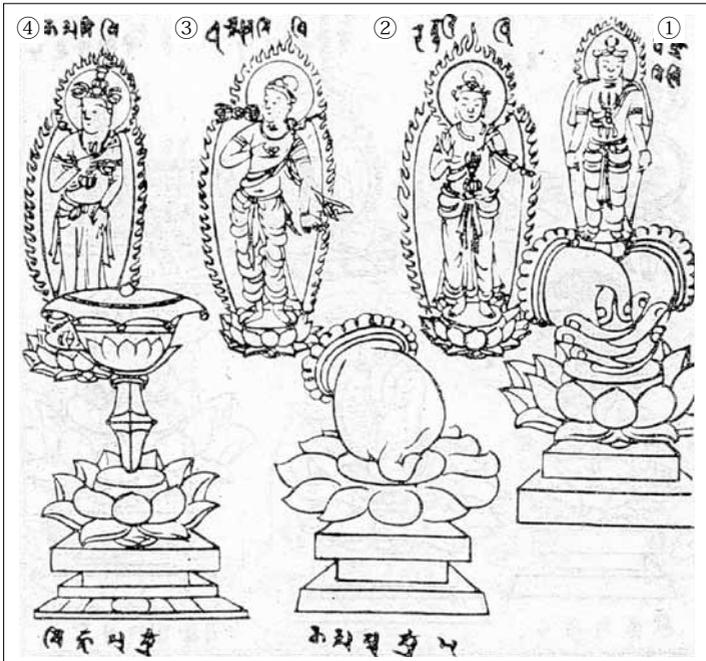
し、杵は心に当つ。右は頭指を屈し、大指を以て、之を押し、余の三指は皆な舒べ、掌を揚げ、乳に近くす。

(三) 密言 ③ dharmanidhi

観門 前の如く菩薩を画く。面は右側に向けて立ち、口の外に当りて三股杵有り。杵は横の状〔態〕で、一頭柱は口に着く。左手は、頭〔指〕、大指を相捻じ、余は皆な散じ舒べ、臂は下に垂る。右は五指を舒べ、心を掩う。

(四) 密言 ④ karmanidhi

観門 次前の菩薩の如く、^{かたむ}側き立つのを画く。心に当り、三股十字金剛杵有り。右手を以て、指を舒べ之を抱く。左は指を舒べ、下に散じ、臂を垂る。両肩に各々、半三股杵有り。冠の中、上に向くのと、鬘の左右に各々、半三股杵有り。(両肩の各々の半三股杵は画かれていない)



(2) 金剛神通悉地・成弁印智

H238 それより、金剛神通悉地を成弁する印智を教授すべし。

- 1) 金剛遍入が生じ終わったとき、金剛形より成る水を
観修すべし。成就者は速やかに水の上を歩むであろう。
- 2) 同様に、遍入を生じて、自ら自己の真正の姿を
観修するならば、自らかの仏の姿ともなる [であろう]。
- 3) 同様に、遍入せる自己を『我は虚空なり』と自ら
観修するならば、望む限り、見えざる状態に達するであろう。
- 4) 自ら金剛 [杵] に遍入せる者となり、『我は金剛杵なり』と観修するならば
場所を上昇せんとする限り、虚空を行くものとなるであろう。と。

慶喜蔵 (D 138a1~, P 156b3~)

1) 次に「金剛神通 [悉地]」であって、心の自在性なるものである。その「悉地」であって、そのものを成就することである。その「印」とは、次に説くところの「金剛遍入」云々である。その「智」とは、決定であって、それを「教授すべし」というのは、教示すべしということ、本尊瑜伽をなして、金剛微細を観修することで、二ヶ月の間なすべきである。次に、拡散と収斂の瑜伽を一ヶ月の間観修して堅固になすことと、夜通し金剛微細の拡散の瑜伽を観修すべきである。次に、金剛微細の拡散の瑜伽によって、水を金剛微細の自性として目の当たりを見るまで、それまでの間観修すべきである。次に、金剛語によって「vajra jala」と誦して、水の上を歩くべきである。

2)「このように遍入をなしてまた」というのは、同様に、本尊瑜伽を先ずなして、金剛微細の観修をなすならば、それによってそれは成就される。「ある色身において自己の身体である」というのは、調伏の力によって、本尊とある色身において、自身と見ることを欲することと、それとそのものに自の身体を観修して、「vajra rūpa」と誦して、仏陀のお体も自身と自ら見るならば、他の者たちに対しても見ることができよう。

3)「このように、自己における利益 (phan, 経典には phab「遍入」とある) よりも」

というのは、本尊瑜伽をなして、同様に、金剛微細の観修を円満して、「私は虚空である」と自の自性を観修して、「vajra ākāśa」と誦して観修するならば、欲する限り、その限りの間、見えなくなるであろう。

4) 「私は金剛遍入者となって」というのは、以前の如く、金剛微細の観修をなしてという意味である。「私は金剛であると観修するならば」というのは、自身を(D138b) 五股金剛杵の姿と想うことである。「場所から登らんと欲する限り、その限り虚空に行くものとなるであろう」というのは、自分のいる場所から始めて、須弥山の頂に至るまで、金剛の梯子の鬘によって満たされていると想い、「vajram aham」と誦して、思量した梯子の鬘から、乃至欲した場所に行くべきである。それはまた、金剛の梯子を虚空において、観修して登攀するならば、

「登る場所の限り、その限り虚空となるのである」(VŚ.D188b3, 213a5: 北村 p.146:52, p.213:511)

と説かれているのである。

〔釈友〕 (D 100b7~, P 118a6~)

「金剛神通」云々において、自在によるならば「神通」であって、心自在の自在である。その悉地(D 101a)を「成弁」することである。その「印」とは自加持等によってなすところの大印である。その「智」であることによるならば、「神通の悉地を成弁する印智」である。

1) 「金剛遍入をなして」というのは、金剛微細を観修することによって堅固となることになさるべし。それを生じることと、「水の上に金剛形に似たものを」¹ 観修し、それより水の上を歩むべきである。ここにおいてまた、以前説いたように、そのように所作があるので、「そのように遍入を生じるべきである」というのである。以前に説いた儀則によって、金剛微細を観修し、堅固になして、調伏の力によって自身の姿をどこであれ示さんと欲する、そこここに自身の姿を想うべきである。

〔訳註〕1 「水の上に金剛形に似たものを」H238,1) には、vajrabimbamayam jalam とあるが、チベット訳によれば、jalam は jale とすべきか。

2) 次に、自身によるそのような姿を自らによっても見て、他の者たちにも示そうとして、そのような自性を観修する限り、その限りそのように顕現するけれども、以後はそうではない。「同様に」というのは、金剛微細遍入を示したのである。

3) 「自ら自身は虚空である」というのについて、そのように観修して、自身の身体が支分となる限り、その限りの間消滅して、極微から六部分〔となる〕と分別することによって観修する。次に、私は虚空であると、隠没（隠身）をなして、そのように自身を観修する限り、その限りの間、穩没（隠身）するであろう。さらにまた、左手の掌に四印の曼荼羅を想い、その中央に自身が坐すことを想う。次に、金剛拳を結んで、その拳を如説の理趣によって、虚空であると観修するならば、拳を解かない限り、その限りの間は穩没（隠身）するであろう。

4) 「金剛遍入」とは、以前の如くであって、自加持等をなして、一ヶ月或いは一年の間、如説の理趣によって、自身は軽性であると信解すべきである。「金剛であると自身を観修して」というのは、自身は金剛薩埵であるという意味である。次に、四ヶ月或いは一年を限りに住し、そこに坐しつつ成就する時に (D 101b)、椅子或いは精舎の上、或いは山等の上に坐して、夜通し心呪を誦して観修するならば成就するであろう。すなわち、欲する限り、その限りの間虚空を行く者となる。

H239 そこにおいて、以下の心真言がある。

- 1) vajrajala / バザラ ジャラ // (金剛の水よ)
 - 2) vajrarūpa / バザラ ロハ // (金剛の姿よ)
 - 3) vajrākāśa / バザラ カシャ // (金剛の虚空よ)
 - 4) vajram aham / バザラ マカン // (我は金剛杵なり)
- [バゾロウ カン (vajro 'ham)]

【訳註】『六種曼荼羅略釈』

四種の成就観門が有る。(金剛神通悉地 H238)

(一) 密言 ① vajrajala (H239)

観門 一菩薩を画く。方座を敷き、二手を舒べ、右は左を押す。身、面、右を向き、前の方池(方形の池)に対す。池は宝砌(宝石畳み)を以て、中に三股十字杵有り。

(二) 密言 ② vajrarūpa

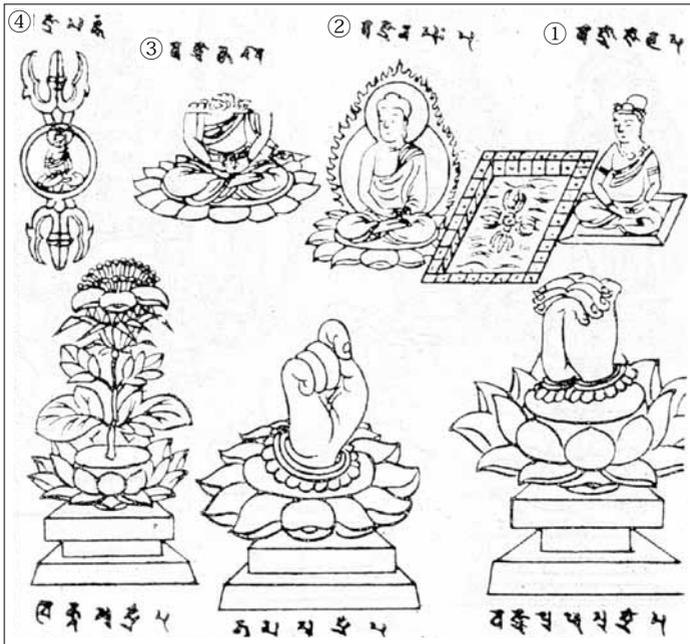
観門 前の如く敷座し、如来形を作す。半跏、手も亦た、前に准ず。

(三) 密言 ③ vajrākāśa

観門 前の如く敷座し、菩薩は半跏、正坐す。二手は前の如し。其の胸以上は、空に帰して、隠る。

(四) 密言 ④ vajram aham

観門 豎に三股杵を画く。杵の把は環の如し。環の[形]勢は狭く長し。内に一菩薩有り。正坐、半跏す。二手は五指を舒べ、右は左を押し、臍下に在り。



(3) 金剛持明悉地・成弁印智

H240 それより、金剛持明の悉地を成弁する印智を教授すべし。

1) 月形を描いて、上方の虚空に昇る [と想い]

掌の中に金剛 [杵] を観修するならば、金剛持明者と成るであろう。

2) 月形に昇って金剛宝を観修すべし。

清浄なる自体を有する者は望む限り、瞬時に飛び上がる。

慶喜藏 (D 138b2~, P 157a5~)

「金剛持明」云々について、金剛によって暗示される智を持するのが「金剛持明」である。その「悉地」とは、「金剛持明の悉地」であって、そのものを成就するのである。

1) その印とは、「月形なるものを描いて、上方の虚空に昇る」云々である。その智は決定であって、それを就学すべきである。「月形なるものを描いて」云々について、本尊瑜伽をなして、「vajra dhara」と誦して、自ら金剛薩埵の身が月輪に住すると想い、そのものを誦して、一カ月、或いは六カ月、或いは一年の間観修すべきである。それにより相を獲得することとなる。また、夜通し観修するならば、「金剛持明」となるであろう。

2) 「金剛宝を観修するならば」というのは、本尊加持をなして、「ratna dhara」と誦して、自身は虚空蔵である。月輪に住し、金剛宝を持すると観修すべし。「自身清浄なるものは望む限り」というのは、この観修によって、いかなる時も虚空蔵の色身において自身を毎日繰り返し見るものとなるその時、清浄な自身を有する者となるであろう。彼が虚空に行くことを想うならば、夜通し観修すべきである。その時、その瞬間に、虚空の行境に行くことを欲する限り、その限りの間、虚空に行く所の (D 139a) 宝持明者 (rin po che'i rig pa 'dsin pa) となるであろう。

釈友 (D 101b1~, P 119a1~)

「金剛持明」云々について、金剛 (堅固性) によって喩えられる持明が「金剛持明」

である。もしくは、金剛の印を成就する持明であることによるならば「**金剛持明**」である。その悉地たることが「**成弁**」である。その〔金剛〕印は四種であつて、大印と三昧耶印と法印と羯磨印等である。顛倒なき悉地を成弁するであろうその智が「**金剛持明悉地成弁印智**」である。

1) 「一の月形を描いて」云々について、誰であれ相応の理趣で、金剛持明そのものを欲するならば、その者は十五夜の月の前で、水の満ちた器を安置して、月形の影像をよく観察すべきである。その相をさらによく作意すべし。次に一切の所作を離れて、空闲処にて結跏趺坐し、身体を端正に真っ直ぐにし、舌を口蓋に押し当て、根 (dbang po : indriya) を防護して、安慧をもって〔月の〕顕れる方角に於いて、見るところの月輪を四肘ばかり〔前〕に、その色形を安置して、観修すべきである。さらに、毎日月の尽きない限り、その限り以前に説いた器の相を意に持して観修すべきである。さらにまた、十五夜の〔月の〕相を意に持して、動くか、あるいは顕れるか、あるいは光明の相を生じるまでの間観修すべきである。次に、心を堅固にすることと、前方に描いた月輪の如きもの、それを消滅させて、前方に一肘ほどの月輪を想い、接触の相が生じるまでの間観修すべきである。次に精勤して、〔一〕麦ほど、二麦ほど、一指ほど、二指ほど、四指ほど、八指ほど、次に〔一〕肘ほどの (D 102a) 間に拡散し、拡散したように、そのように収斂すべきである。次にまた、一指ほどの量の月輪そのものが、四時より (dus bzhi nas ?) 昇ると観修すべきである。次に、二指、三指、四指、八指と、次に、〔一〕肘ほどに次第に観修し、その後で悉地に入るべきである。そして、月輪の上に自身が住すると観修し、手に金剛等の印があることを観修し、月輪の下から風が持ち上げて、欲する所、そこに運ばれると想うならば、そのようにして金剛持明等を成就するであろう。

2) 「**自体清浄**」というのは、観修清浄において自体清浄と知るべきである。

H241 3) 数々の月形に昇り、金剛蓮華が手に住すると

観修するならば、金剛眼という持明者の位が授かるであろう。

4) 月輪の真ん中に住して羯磨金剛杵を観修すべし。

毘首金剛を持つことより、速やかに一切持明者と成るであろう。と。

慶喜蔵 (D 139a1~, P 157b3~)

3) 「金剛蓮華が手に住する」というのは、本尊瑜伽をなして、「**dharmadhara**」と誦して、それ自体が金剛法の身となり、月輪に住すると想うべきである。次に、同様に、自身を〔金剛法と〕観修すべきである。次に、相の出現と、夜通し観修するならば、法持明となるであろうというのは余分である。「観修するならば、金剛眼によって」というのに相応して、何の故に「観修するならば、金剛眼」とは、金剛法によってである。「持明者の果位が授かる」というのは、持明者の果位である蓮華持明の悉地が授かるという意味である。「それを観修することによって、その果位を得て、それが授かるのである」と説くのである。

4) 「業金剛を観修して」というのは、同様に、本尊瑜伽をなして、「**karmadhara**」と誦して、自身を金剛業毘首金剛と観修して、金剛業の身と自身を想うべきであって、同様に、自身を〔毘首金剛〕と観修すべきである。次に、夜通し観修すべきである。「毘首金剛を持つことより、一切持明と速やかになる」というのは、このように自身を以前説いた理趣によって観修するならば、(*) 毘首金剛を持する持明者とその瞬間にまさになるであろうという意味である。

【訳註】(*) ここに P は『「毘首金剛を持す者であって、金剛業の一切の持明者と速やかになる」という』(P 157b8~158a1) という一文を挿入するが偈頌の重複であり、削除する。

釈友 (D 102a3~, P 119b5~)

3) 「持明者の位」というのは、持明そのものであり、「金剛眼」というのは、世尊世自在〔の位〕を授けるという意味である。

4) 一切金剛(金剛業)の三摩地によって、月輪の中央に坐して、羯磨金剛〔杵〕が手に住すると観修する。それはまた、金剛でもあって、一切でもあるならば「一切金剛(羯磨金剛杵)」である。それを持つことによるならば一切金剛持であって、世尊金剛業である。一切の先端を有する金剛によって観察する持明者が「一

切持明者」である。

H241-2 そこで、以下の心真言がある。

- 1) **vajradhara** / バザラ タラ // (持金剛よ)
- 2) **ratnadhara** / アラタンノウ タラ // (持宝よ)
- 3) **padmadhara** / ハンドマ タラ // (持蓮華よ)
- 4) **karmadhara** / キャラマ タラ // (持羯磨よ)

【訳註】『六種曼荼羅略釈』

四種の成就観門有り。(金剛持明悉地 H240, 241)

(一) 密言 ① vajradhara (H241-2)

観門 一月輪を画く。左辺に一菩薩有り。左足を及び左手を挙げて、之に攀登（よじ登る）す。輪の後に三股杵有り。微かに其の鋒を現す。

(二) 密言 ② ratnadhara

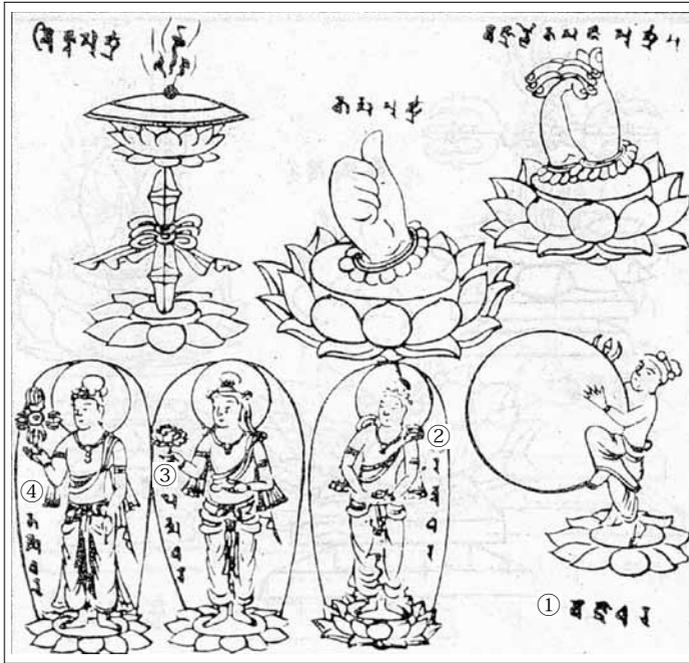
観門 月輪の中に立つ一菩薩を画く。右を顧、二手の右は左を押し、臍に近し。一の円珠を持つ。此の尊、及び次後の二菩薩の月輪は身を周り、狭長なり。

(三) 密言 ③ padmadhara

観門 月輪の中に面を右に向け、立てる菩薩を画く。右手は一敷蓮を掌にし、臂を引き前に向ける。左は指を舒べ、掌を上げ、心胸に近し。

(四) 密言 ④ karmadhara

観門 次前の立てる菩薩の如し。右手は三股十字杵を掌にし、左手は下に垂る。



(4) 一切如来最上悉地・成弁印智

H242 それより、一切如来の最上の悉地を成弁する印智を教授すべし。

- 1) 虚空界において、一切金剛の三摩地を想って、
金剛〔杵〕を体とする者は望む限り、瞬時に飛び上がる。
- 2) 一切清浄の三摩地を観修しつつ、智を成就せる者は
速やかに、最上の五神通を獲得する〔であろう〕。

慶喜蔵 (D 139a5~, P 158a1~)

「一切如来の」云々について、一切如来の最上の悉地を成就すべきためである。

「印」とは、一切金剛の諸三摩地であって、その「智」を教授すべきである。

- 1) 「一切金剛の三摩地」というのについて、「一切金剛」とは、十二峯の毘首金

剛[杵]であって、それによって暗示される菩薩摩訶薩の業が「一切金剛」であり、そこにおいて、可得される三摩地が「一切金剛の三摩地」である。「虚空界において想って」というのは、欲するところの(D 139b)本尊瑜伽をなして、「vajravajra」と誦して、自身は月輪の上に住する金剛業大菩提薩埵の身であると思うべきである。そこで、堅固とならない限りの間(堅固となるまで)、観修すべきである。次に、愛樂(spro ba:autsukya or utsāha《努力》)すべきであるが、[それは]

「堅固になって、愛樂すべきである。堅固にならないならば、愛樂すべきではない」(出典不詳)

と説かれているからである。観修を撰取するときにおいても意そのものによって入るべきである。このように目の当たりに見るまで、それまでの間観修すべきである。そこで、

「夜通し観修すべきであって、観修するならば成就するであろう」(出典不詳)と説かれているのである。「金剛を自体とするものは、望む限り、その限りの間舞い上がるであろう」というのは、一切に行き渡る毘首金剛の三摩地を得ることによって、金剛の自体と称する金剛業菩薩の身となって、虚空の境界に行かんと欲する限り、その限り一切の虚空界に行くこととなるであろう。

2) 「一切清浄」¹とは金剛法である。そこにおける所縁の三摩地が「一切清浄の三摩地」であり、それを観修して修学するならば、無上であって最勝なる五神通を速疾に迅速に得るであろう。誰が得るのかとならば、智を成就して、金剛法を成就した者であって、次のように示されている。すなわち、本尊瑜伽をなして、「śuddhaśuddha」という金剛語によって誦して、金剛法において自身が相を得るまで、それまでの間観修するのである。次に夜を通して観修するならば、世自在の如く五神通を獲得するものとなるであろう。

【訳註】¹ 「一切清浄」 thams ca dag、経典には、kun la dag pa: sarvasuddhi- とある。

〔釈友〕(D 102a5~, P 119b8~)

「一切如来」とは、仏と菩薩たちを包摂している。彼等にふさわしい最勝の悉地

が何であれ、それを「成弁する」とは獲得することである。その「印」とは四であって、その[印の]「智」が[印智]である。そのような印が何であれ、観修によって欲するままに成就するであろう。それらの悉地は顛倒 (go bzlog pa ?) の理趣によって住して、第一は羯磨部に撰せられるものであり、それ故に、

1) 「一切金剛の三摩地」云々と説くのである。「一切金剛」とは三股四口 (十二杵金剛) であって、それを一と二と三と四と五の次第によって広大に「想う」のである。「虚空界において」というこれによって精勤 (spro ba) を示したのである。(D 102b) 憶念することによるならば「想う」であって、自己の本体も想って、羯磨金剛の光明等から如来の身を生じて、円満することを想い、種々の姿と敏捷性を想い、続いて欲するままに動く風によって上昇すると想うならば、欲する限り、その限りの間浮動するであろう、という意味である。

2) 「一切清浄」というこれは、法部と相応する悉地を示したのである。「一切清浄」とは、世尊の勝義の法であって、その境界に対し思所縁を観修する心であって、一切清浄の三摩地と説かれる。「観修」とは、修習をなすことである。「最上」というのは、世自在等と相応する「五神通」である。それはまた、天眼と天耳と他心智と宿住随念と神通所作智などであって、これらの五神通を智成就せんとする者は速やかに獲得するであろう。

- H243** 3) 一切の虚空は金剛薩埵よりなるものと憶念しつつ、
 堅固なる随念を持つ者は、速やかに自ら持金剛となるであろう。
- 4) 虚空界において、一切は仏の影像よりなれるものと信解して、
 一切諸仏の三摩地を[観修するならば]、仏性を成じるであろう。と。

慶喜藏 (D 139b6~, P 158b3~)

3) 「金剛薩埵と相似に」云々について、本尊瑜伽をなして、「satvasatva」と誦して、金剛薩埵の身を自身と想うべきである。次に、自身をその身と見るまで、それまでの間観修すべきである。次に金剛薩埵と相似であると、一切虚空界を憶念すべきである。(D 140a) 正精進を観修することによって、何になるかとならば、「自身を憶念することを堅固に持せば、持金剛と速やかになる」と説くのである。次

のように示す。観修の力によって、十方の虚空を金剛薩埵が無間に遍満することを見る時、その時、憶念を堅固に持するものとなるのである。次に夜通し観修することによって、持金剛と速やかにそれとなるであろう。

4) 「虚空界 [において]」云々について、「**仏陀の色身を想って**²⁾」というのは、毘盧遮那等の如来を成就せんと欲して、自分の欲する尊の瑜伽をなして、「**buddhabuddha**」と誦して、毘盧遮那等の如来の身を自身と想うのである。次に、その身を自身と相続不断に見るまで、それまでの間観修すべきである。次に、仏陀のその色身を仏陀の身の自性として、十方の虚空界において、一切三界を信解すること (lhag par mos pa: adhimukti?) を観修すべきである。このように観修することによって、その成就者は何になるかとならば、「**一切諸仏の三摩地より仏性を成就するものとなる**」と説かれるのである。そこにおいて、一切諸仏の心一竟性は「**一切諸仏 (sang s rgyas kun) の三摩地**」である。「**ni**」³⁾とは確実に持するか、あるいは不相離であって、仏性を成就するであろう」

【訳註】1 「金剛薩埵と相似に」 rdo rje sems dpa' 'dra bar ni、サンスクリットは vajrasattvamaya- 「金剛薩埵よりなるもの」。

2 「想って」 bsams nas、P、D は dmigs (所縁として) とある。

3 「ni」 4) b-pāda 「sang rgyas gzugs su bsam nas **ni**」とあるが、末尾の ni を指しているか、あるいはサンスクリット c-pāda 「sarvabuddhasamādhiṃ **tu**」の tu (チベット訳にはない) を指しているかのどちらかであろう。

【釈友】 (D 102b4~, P 120a8~)

3) 「**金剛薩埵と相似**」云々は、宝部の門からであって、世尊金剛薩埵が宝部において目の当たり語るわけではないけれども、而もこれら一切は、それを変異したものであることによるならば、ここでは金剛薩埵の三摩地を示しているのである。それはまた、浮動と非浮動の一切の出来事の自性は金剛薩埵の本性であって、出来事のみで尽きるものではなく、金剛薩埵の三摩地によって虚空もまた、何ら遍満しないことはないのである。このように観修することは「**憶念**」を堅固に保つ

ということで、観修の堅固な所作を持することである。今は、拡散と収斂の所作を持する瑜伽者は持金剛性を速やかに獲得するであろうという意味である。

4) 今は如来部の門より悉地の最勝の教え (upadeśa) を示して、心を観察することなど (D 103a) の次第によって、自身を仏の姿に生じて、その姿もまた堅固になる限り、その限りの間観修すべきである。次に第二は、前と右と左と後ろと、次には次第に一切虚空界に仏の姿の自体によって遍満すると想うべきである。このようであるならば「**仏の三摩地によって一切に遍満することによって、仏性をも成就するであろう**」と説かれるのである。

H244 そこで、以下に心真言がある。

- 1) vajravajra / バザラ バザラ // (金剛中の金剛よ)
- 2) śuddhaśuddha / シュダ シュダ // (清浄中の清浄よ)
- 3) sattvasattva / サトバ サトバ // (薩埵中の薩埵よ)
- 4) buddhabuddha / ボダ ボダ // (仏陀中の仏陀よ)

一切の悉地智の成弁である。

釈友 (D 103a2~, P 120b7~)

このように説かれた諸々の三摩地において、親近することと悉地の時における各々の心呪はこれらである。「**一切の悉地**」云々は、上述の如き悉地の所作の終結である。このように後に成就すべき結果は、親近することと悉地に依託することを示して、今は観修のみに依託する副の結果を秘して、守護することの自体を示すことを求めて、「次に」(H245) 云々と説くのである。

【訳註】『六種曼荼羅略釈』

四種の成就観門有り。

(一切如来最上悉地 H242, 243)

(一) 密言 ① vajra-vajra (H244)

観門 一菩薩を画く。右に向き、半跏して処す。二手を舒べ、右は左を押す。頂の上、頂の右、頂の左、及び左右の肩、肘、膝に、各々、三股金杵が湧 [出] す。

(二) 密言 ② śuddha-śuddha

觀門 前の如くの菩薩、一円珠を掌にし、珠に焰起る。頂、及び両[方]向に当たり、九
 軀の菩薩を分布す。皆な合掌して半身を現す。已上は大菩薩の勝已上の句に於て、之
 を布す。

(三) 密言 ③ satva-satva

觀門 前の如くの菩薩、一朵の紅蓮花を掌にす。頂上、及び頂の左右に、各々一仏
 有り。胸已上を湧出す。両肩の外に当りて、各々一仏有り。空に騰りて来たり、身
 に入る勢の如し。肘の両[方]向に、又、二仏有り。湧出す。膝の両傍に、各々一
 仏有り。空に騰りて来たり、入らんと欲する勢なり。

(四) 密言 ④ buddha-buddha

觀門 方座具を敷き、如来形なり。全跏して処す。二手を舒べ、右は左を押し、臍
 下に近し。頂、及び身を繞りて、九仏有り。半身を湧現す。



[二] 秘密法

(1) 誓戒・心呪

H245 そのとき、[弟子が] 秘密を任持するに堪えるものとなるよう、[阿闍梨は] 彼に対し最初にまず、誓いの心呪 (śapathahṛdaya) を語るべし。

om vajrasattvaḥ svayaṃ te 'dya hṛaye samavasthitāḥ /

nirbhidya tat kṣaṇaṃ yāyād, yadi brūyād idaṃ nayam //

オン バザラ サトバ ソバエンデイ ニヤキリダエイ サンマバシテイタ

タジリ ビニヤ タタキシヤノウヤ ヤヂヤ ニボロヤ チナンノウ エン

(金剛薩埵が、今日、汝の心臓に自ら安住せり。もし [汝が] この理趣を [誰かに語るならば、その瞬間に [金剛薩埵は汝の心臓を] 引き裂いて出ていくであろう)

慶喜藏 (D 140a6~, P 159a3~)

「次に秘密を任持するに堪えるものを説いて」というのは、自ら金剛薩埵等の瑜伽によって、金剛薩女等の部の三昧耶の四金剛印、或いは自 [尊] の相の印を面前に安置し、それを月輪の上に想って、集会の印によって鈎召し、百八名にて称賛し、鈎召 [の印] 等によって、鈎召と引入と縛と自在をなして、三昧耶印 (D140b) によって成就して、法 [印] と羯磨 [印] と大印によって刻印し、諸の灌頂印によって灌頂し、八供養によって遍く供養し、現前するか如く相續不斷に見るまで、それまでの間観修すべきである。この等定の分位はここでは秘密語と説く。自 [尊] の印が女尊と成ること、それを見て、次に説く理趣によって、それと一緒にになると信解することは秘密であるので「秘密」である。このような秘密にすることによって、仏の菩提を成就することとなり、秘密を獲得して、不説の理趣 (mi smra ba'i tshul) と観修の瑜伽によって持す事をなす。若し、賢者が真実義を受持するものとなって、その時、彼に対して何としても秘密を能忍すべき瑜伽によって授与すべきである。それはまた、如何に授けるべきかとならば、尊敬せざる者は捨て去られるべき為に、彼が暫時誓いを立てることをなした時、それから説くべきである。何故この瑜伽によってかとならば、愛欲を有する者たちが確実に諸仏を成就する¹のである。

「心臓に安住すること」²というのは、以前に説いた理趣によってである。

【訳註】1「諸仏を成就する」 sangs rgyas rnams sgrub par byed pa、Pは sangs rgyas nyid du bsgrub par byed pa 「仏性を成就する」とある。

2「心臓に安住すること」 snying ga kun du gnas pa ni とは、誓いの心呪の hrdaye samavasthitah の訳であろう。経典は音写語である。

【釈友】(D 103a4~, P 121a1~)

「秘密を任持したものであることによって」というのは、秘密にされるべき義は、命を賭しても誰に対しても語らないことであって、そのような堅固を有する有情が「秘密を任持したもの」といわれる。「彼に対し先ず誓いの心呪を語るべきである」というのは、次のように示す。則ち、そのような有情に対しても軽はずみに示すべきではなく、誓誠もまた、誓わせて [から] 示すべきである。

H246 それより、次のごとく言うべし。

『汝はこの誓いの心呪を違越すべからず。汝が危険を回避できずに非時の死を [迎え]、その身体のままに奈落に落ちることなきように』と。

【釈友】(D 103a5~, P 121a3~)

「誓いの心呪」を授けた後も、重ねて違越することなきよう誓わせるのである。違越することは罪過であって秘密の義を語ることとなるであろう。「危険を回避できずに」というのは、誰であれ説くことによって死の因となることで、すなわち、火に投ぜられ、坑に墮とされ、毒を飲まされ、刀杖で打たれることであって、そのような類いの、それらの危険を回避できないことによって、当然苦しみ遭遇するのは必定である。同様にここでもまた、誓誠より違越するならば、確実に苦しみと遭遇することとなるのである。

(2) 秘密印智

H247 それより、秘密の印智を教授すべし。

- 1) 金剛遍入を生じて、等至せる者は、金剛合掌の掌にて微かに拍すべし (tālam dadyāt)。山をも自在になすであろう。

[金剛 [拍] 掌の印]

- 2) 金剛遍入の儀則にのっとり、金剛縛の掌をもって
微かな拍の仕草にて撃すべし (hanet)。山をも遍入するであろう。

- 3) 同様に、遍入の儀則によって、金剛縛を伸展し、
諸指の先端を等しく打つべし (samāsphoṭāt)。百の部族 (kulaśata: 百種 [の煩惱]) を瞬時に破壊するであろう (hanet)。

- 4) 微細な遍入の儀則に従って、諸指を等しく揃え、
金剛縛を解くことは、一切の苦の破壊という最高である。

慶喜藏 (D 140b5~, P 159b2~)

1) 「それより、秘密の印智を教授すべし」というのについて、「秘密」は説き終わった。そのものが瑜伽タントラに刻印されているので「印」である。その「智」とは、そこにおける決定であって、それを「教授すべし」とは、教示すべしである。「金剛遍入を生じて」というのは、そのように説かれた秘密の瑜伽を生じることがここにおける「金剛遍入」である。それを生じて面前に自の印の女尊、或いは薩埵女 (D sems ma, P sems dpa' : Dをとる)、金剛女等が部の女尊の印であり、瑜伽の力によって相續不断を想うのである。何故、「等至せる者は、金剛合掌の面 (掌) を微かに拍するならば」と説くのかとならば、等至そのものによって、それより他にはなく、それも又、そのようであるのだけれども、心が散乱して、等至しないことがあってはならないからである。(D 141a) 如何に拍掌するのかとならば、「金剛合掌の面によって」と説くのであって、金剛合掌の相は後で説く。それを縛してその手の掌の内面を拍掌するである。「微」というのは、面そのものと区別がつかないことを示したのである。次のように、金剛合掌を縛して、その手の両面で、繰

り返し微かに打つべきである。「山をも自在にする」というのは、合掌の面の和合、それによって無心の山をも自在となして、成就者の自在となすならば、他のものは何をか況んや。もし成就者が有心をもって、山をも有心の如くになして、それもまた、成就者が思いのままに自在になすことをなすならば、有心のものは何をか況んや。思いのままになると、殊勝に説かれているのである。

2)「金剛遍入の儀則によって」というのは、以前の如くである。「金剛縛の掌によって」というのは、金剛縛を結んで、同様に手掌の二面(掌)を互いに微かに微かに繰り返して拍することである。それはまた、何故かとならば、「微かに拍する仕草によって」と説くのである。「山をも遍入する」というのは、成就者が遍入の仕草をなすならば、成就されるべき身において、無心の山をも遍入し、遍入することをなすならば、有心の如来たちは何をか況んやという意味である。

3)「同様に、遍入の儀則によって」というのは、以前の如く相を得ることによってである。「金剛縛を伸展して」というのは、金剛縛を結んで伸展することである。それは何かとならば、「指の先端」であって、二頭指である。「等しく打つならば」というのは、そのもの(二頭指)を拍することで、等しく撥して(mnyam par dral te)、等しく拍することである。それによって「百の部族(rigs brgya:百種[の煩惱])を瞬時に破壊するであろう」というのは、貪欲・瞋恚・愚痴・迷悶・無明・(D 141b)・邪見・疑惑等の煩惱や随煩惱を生じた者たちが、自性からして清浄なることを信解し、二指の先端を拍すことによって、[それらの煩惱を]壊滅するであろうという意味である。

4)「微細なる遍入の儀則をなして」というのは、以前の如くである。「一切の指を等しく揃えて」というのは、金剛縛を結んで、一切の指を伸ばして合掌の仕方でも等しく揃えること(金剛合掌)である。かくの如くならば、一切の指を等しく揃えることとなり、それはまた、一切法は自性からして光明であることを示したのである。それ故、「金剛縛を解くこと」は、「一切の苦を破壊する最勝である」と説くのである。いかなる時も、一切法は自性からして光明であると観修し、一切の指を等しく揃える時、その時、障礙無き智を生じて、一切の安楽と悦意を獲得し、一切の苦を静めることとなるのである。

〔**釈友**〕 (D 103a7~, P 121a6~)

1) 「**金剛**」というのは、世尊金剛薩埵である。それが(D 103b)遍入するならば「**金剛遍入**」である。それを「生じること」とは、金剛薩埵との瑜伽をなして、成就されるべきものに入り、入った後、金剛合掌を結んで身中に隙間なく遍満をなして、金剛合掌を拍打すべし。「等至すること」というこれは、金剛薩埵の色形を観修するという意味である。「合掌」というのは、指を分かつたないという意味である。合掌をどのように拍打すべきかとならば、そのために「曼荼羅」(dkyil 'khor)¹と説くのであって、少しくという意味である。「山をも自在となる」というのは、瑜伽の力を示したのである。この瑜伽によって無心の石の塊をも自在になすならば、有心のものたちは何をか況んやという意味である。このように説かれた「金剛遍入」は四瑜伽共に於いても² 相応すると見るべきである。

〔訳註〕 1 「曼荼羅」 dkyil 'khor とあるが、経典には dal gyi とある。dal は dkyil 'khor の略字でもあるので、そのまま置き換えたのであろう。dal gyi とはイェシケの辞書に依れば、slowly, softly, gradually とある。

2 「四瑜伽共に於いても」 sbyor ba (P ba'i) bzhi char la yang、P によれば、「瑜伽の四分の一」とも読めるが、bzhi cha (四分の一) に ra の格助辞がつき、つぎに la の格助辞が来ているので、D 版のように、bzhi cha は sbyor ba に掛けて「四瑜伽とも」とした。四瑜伽とは、蔵文辞典 (p.2029) によれば、「正等瑜伽 (rnam kun mngon rdsogs sbyor ba)、頂瑜伽 (rtse mo' i sbyor ba)、次第瑜伽 (mthar gyis pa'i sbyor ba)、刹那瑜伽 (skad cig ma'i sbyor ba)」とあるが、ここでは不明。

2) 「**金剛縛の掌**」というのは、「金剛縛の上部をそのままに壊さず、両手の掌で心臓を拍すべきである」という意味である。残余のものも同じである。

3) 「**金剛遍入**」というのは、以前の如くであって、金剛縛を心臓に伸ばして諸指を拍すべきである。「先端」というのは相のみに過ぎず、諸指もここで拍すべきである。「等しく拍掌して」というのは、同時に拍すことであって、女性に対して指を拍す仕草(理趣)でなすべきである。

4) 「**微細な遍入の儀則をなして**」というのは、金剛微細の瑜伽観修において観

修することである。ここでは、金剛微細の瑜伽を示したけれども、本尊遍入を示さず、同様に後に本尊遍入は示して、金剛微細〔瑜伽の〕観修は示さないけれども、そこでは、金剛微細の縛を如実に以前と同様に知るべきである。ここにおける本尊遍入如何とならば、同様にここにおいても本尊遍入は見るべきであって、同様に入って一切の身を円満し、何であれ苦によって苦しめられるその苦を、**vajra hara** と言う心呪を誦して、(D 104a)「諸指を等しく揃えて」というのは、諸指をよく縛して、金剛縛を心臓の所で説くべきである。

【訳註】『六種曼荼羅略釈』

四印有り。

(一)

印名 ① vajratala

印相 二手の五指を舒べ、右は左の中節を押し、相交ゆ。

(二)

印名 ② vajrabandhatala

印相 金剛縛の諸指の中節を相押し、浅き拳を成す。

(三)

印名 ③ vajrabandhavinirmukta (金剛縛解)

印相 金剛縛、微かに拳を開く。

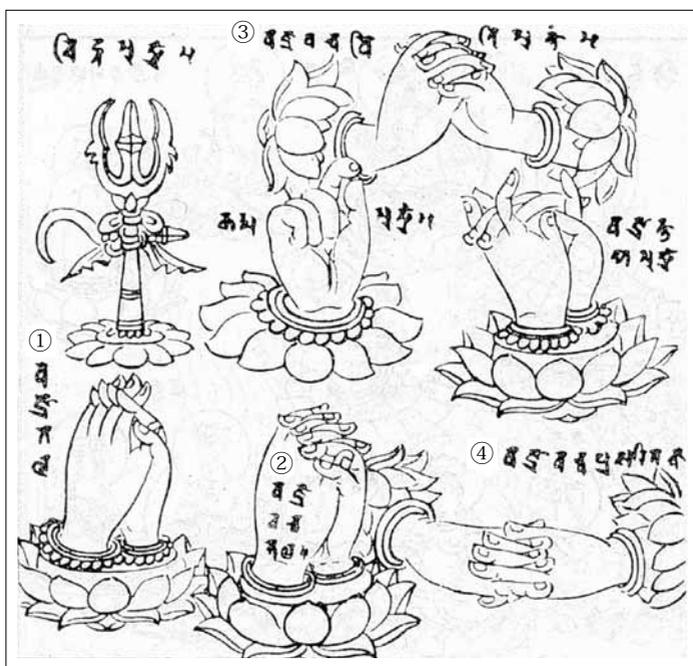
(四)

印名 ④ vajrabandhaprasaritatala

(金剛縛舒展掌)

(略釈には、vajrasarvapasaritatala とある)

印相 金剛縛、大きく之を開く。



(3) 秘密成就法

H248 そこで、これらの秘密の成就法がある。

婆伽を通して、女あるいは男の身体に遍入すべし。

意をもって、あまねく遍入し、その身体に等しく拡散すべし。

以上。

慶喜藏 (D 141b4~, P 160b3~)

「そこで、これらの秘密成就法はこれであって」というのは、この秘密の印、それらを成就するならば、「成就法」である。秘密でもあって成就法でもあるならば、「秘密成就法」であって、女尊の身体に金剛薩埵等の色身によって意を以て入り、その身体を遍く満すこと、それが秘密成就法である。「これであって」というのは、それを説き起こすことである。「女あるいは」云々について、「孔 (bu ga:

婆伽)の中にはいるべきである」というのは、身体の孔であって、リング(性標)の孔の中に入るべきである。何の身体[の孔]かとならば、「女あるいは男の」と説くのである。「意を以てそのように(Tib. de ltar : Skt. sarvaṃ)入って、その身体にすべて遍満せんと欲う」というのは、心によって観修する力によって、男あるいは女のその身体に入って、「遍く(Tib. kun : Skt. samam)」というの、残り無く遍満を欲して、すべてに遍満すべきである。次のように示す、すなわち、(D 142a) 吉祥金剛薩埵等[十六尊]の瑜伽をなして、薩埵金剛女等(金波・宝波・法波・羯波)の印(母)を前方における月輪の上に意を以て想い、その明妃の色身を想って、摂受等をなして、sattvavajri 等々(ratnavajri・dharmavajri・karmavajri)の金剛語によって誦して、目の当たりに見るまで、それまでの間、毎日観修すべきである。

次に、満月の時に、金剛薩埵等[十六尊]の本尊瑜伽をなして、同様に前方に安立し、一切の供養によって供養し、vajrapāśa hoḥ(経典では vajravaśa /)と誦して、意を以てその秘密処より身体に入るべきである。次に、その心臓に住して、身体に遍満して、vajrapāśa hoḥ(経典では vajravaśa /)と誦して、金剛合掌の面にて微かに拍すべきである。そこで彼の自在となるであろう。

更に又、金剛薩埵等の瑜伽をなして、その前方に坐して、vajra āveśa aḥ(経典では vajraśa /)と誦して、同様に彼の身体に入るべきである。次に、彼の心臓に住して、身体的一切に遍満して、vajra āveśa aḥ(経典では vajraśa /)と誦して、円輪による拍の仕草によって、金剛縛の面によって拍すべきである。それによって、本尊の智を生じるであろう。

次に、諸々の障礙を断滅すべきために、再び彼の前方に吉祥金剛薩埵等の瑜伽によって坐して、vajrahana hūṃ(経典では vajrahana /)と誦して、再び彼の身体に同様に入るべきである。次に彼の心臓に住して、一切の身体に遍満して、vajrahana hūṃ(経典では vajrahana /)と誦して、金剛縛を伸展して、指の先端を等しく拍すことによって、百の部族を瞬時に破壊するであろう。ここに、一切法は自性からして清浄であるという信解によって、貪欲等の百部族を瞬時に破壊して征服するであろう。

更に又、彼の面前に (D 142b)、吉祥金剛薩埵等の瑜伽によって坐して、自性からして光明なる智を遍入して、一切の苦を除滅すべきために、vajrahara hūṃ (經典では vajrahara /) と誦して、同様に入り、彼の心臓に住して、一切の身体に遍満して、vajrahara hūṃ (經典では vajrahara /) と誦して、一切の指を等引した金剛縛を解くべきである。

次に、金剛薩埵等の大印を結んで、薩埵金剛女等と自身を一つにすることをなして、「**sattvavajri**」云々と、夜を通して誦して、その色身を自ら目の当たりに見るまで、それまでの間、観修すべきである。さすれば、その瞬間に吉祥金剛薩埵等の悉地を成就するであろう。「それによって」とは、若し秘密の女尊を証得するときは、その部族の女尊であると、その義によって示されたのである。更に又、若し成就すべきものが毘盧遮那等の女尊であるならば、「**心観察より始めて、金剛界よ、と誦して**」(〈H 251,1〉 a,b) 云々によって、毘盧遮那等の瑜伽をなして、ウツタラタントラ (rgyud phyi ma) に説かれた相¹を獲得するまで、それまでの間、観修すべきである。

次に、金剛界大曼荼羅そのものを如実に面前に安置して、一切の供養によって供養して、満月の時の、日が没する時に、金剛界自在女の大印を結んで、vajrapāśa hoḥ と誦して、意を以て不動 (阿閼) の御胸に住し、女尊金剛界自在女の身体を自身と観修すべきである。次に、まさにこの理趣によって、不動 (阿閼) の御胸から出でて、以前に説いた自在の印を結んで、vajrapāśa hoḥ と誦して、同様に毘盧遮那の秘密の処より毘盧遮那 (D 143a) の身体に入って、毘盧遮那の御胸に住して、その理趣によって、毘盧遮那の一切の身体に遍満をなして、水と乳の如くに一つになると想うべきである。

次に、意を以て宝生の御胸に金剛界自在女の色身によって住し、同様に、その御胸から出でて、vajra āveśa aḥ と誦して、同様に、毘盧遮那の身体に入るべきである。次に、毘盧遮那の御胸に住して、同様に、その一切の身体に遍満をなして、以前の如く、遍入の印を結んで、vajra āveśa aḥ と誦すべきである。

また、意を以て無量光の御胸に金剛界自在女の色身によって住し、同様に、その御胸から出でて、vajrahana hūṃ と誦して、同様に、毘盧遮那の身体に入って、そ

の御胸に住して、その一切の身体に遍満をなして、以前に説いた百部族を破壊する印を結んで、vajrahana hūṃ と説くべきである。

また、意を以て、不空成就の御胸に金剛界自在女の色身によって住し、同様に、その御胸から出でて、vajrahara haṃ (hūṃ?) と誦して、以前の如く、毘盧遮那の身体に入って、その御胸に住し、その一切の身体に遍満をなして、以前に説いたところの一切の苦しみを滅除する印を結んで、vajrahara haṃ (hūṃ?) と誦し、説くべきである。

かくの如く、これらの瑜伽によって、仏菩提を自在になして、最勝菩提の印(智拳印)を結んで、vajradhātu と誦して、夜通し自ら毘盧遮那と観修するならば、[毘盧遮那]如来と必ずなるであろう。大毘盧遮那成就法を自在に説いた。同様に不動(阿閼)等より、金剛遍入(金剛鈴菩薩)に至るまでの尊格の一切の成就法は自の印の(D 143b)女尊によって知るべきである。四の秘密印が成就した。

【訳註】1「ウッタラタントラに説かれた相」TS (25章)、H 2567~2708、施護訳『教理分』(大正蔵 433 中~ 436 中)の部分を目指すか。

釈友 (D 104a1~, P 121b8~)

「入ってそれらの所作をなすべし」と説く時、孔はたくさんあるので、どこから入ってよいか判らない。そのために「孔の中に」と説いて、男と女のバガにおいて「孔」というのである。このように一般に言うのだけれども、むしろ、女と男の根であると受持すべきである。それはまた、孔は非常に小さいので、小さな身体でも[入ることは]出来ないのも、それ故に「意をもって」と説くのである。「金剛遍入を生じるべきである」と説くことによって、それ故に金剛遍入の意を本尊の大印として顕示するのである。入って一方に住するべきかとならばそうではない。然らばどのようにかとならば、「その身体がすべてに遍満すると思え」と説くのであって、「一切の根に遍満すべきである」という意味である。誰であれ、このように説かれたこれらの事業をなさんと欲するならば、その者は曼荼羅に入り、阿闍梨よりこれらの加行を曼荼羅において受けるべきであって、心呪もまた受持す

べきである。

次に、四ヶ月の間に収斂と拡散を観修する。次に、夜を通して心呪を誦して観修し、悉地における後の事業をなすべし。事業をなす時においても、最初に本尊瑜伽をなして、心呪を千八回誦呪すべきである。次に、仏の真実と、法の真実と、僧伽の真実と、真実を説くものたちの真実によって、自身のこの事業を成就せんと真実の加持を懇願し、次に諸の事業を始めるべきである。すべての形態において三昧耶を守ることに勤めるべきであり、それによるならば確実に無障礙を成就するであろう。

H249 同様に、以下、[拍] 掌の心呪がある。

vajravaśa / バザラ バシャ // (金剛自在よ)

vajraviśa / バザラ ビシャ // (金剛入よ)

vajrahana / バザラ カナ // (金剛殺よ)

vajrahara / バザラ カラ // (金剛破壊よ)

【訳註】『六種曼荼羅略釈』

四種の成就観門有り。(秘密成就法 H248)

(一) 密言 ① vajra-vaśa (H249)

観門 蓮座の上に一菩薩を画く。交^ま交^はして(足の甲を交えて)処す。二手を舒べ、右は左を押す。面は左に向う。前に方座有り。座の上に大菩薩と面對する一菩薩有り。半跏し、二手は上の如し。項及び身光無く、其の形は狭小なり。

(二) 密言 ② vajra-viśa

観門 次前の如く、蓮座の上に菩薩を画く。其の前に一菩薩有り。合掌し、身を低くし、大菩薩の身に入る如き勢なり。其の首は菩薩の心胸に相当てる。

(三) 密言 ③ vajra-hana

観門 一の立てる菩薩を画く。面は左に向く。右の臂を挙げ、五指を舒べ、下に向いて擬勢(見せかけの威力)す。左手は拳にして、心に近くし、頭指を舒ぶ。前に於て一菩薩有り。半跏し、二手を舒べ、右は左を押す。光焰等無し。

(四) 密言 ④ vajra-hara

観門 蓮台上に一菩薩を画く。半跏して処す。金剛縛をし、右の頭指を下に向け、左の頭指を撥す。菩薩は右(左?)に面す。前に於て、一菩薩有り。半跏して方座の上に坐す。二手を舒べ、右は左を押す。光焰等無し。

